俺がクー・フーリンなのは絶対に間違っている

神崎真

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アイルランドの光の御子（中身別人）がロキファミリアで無双する話。

※タイトルが俺ガイルと似通っていて、何なら略すと俺ガイルですが、俺ガイルとは一切関係がありません。

目　次

第1話　プロローグとは少し違う始まり　1
第2話　兄の背　7
第3話　未知との遭遇1　12
第4話　未知との遭遇2　19
第5話　未知との遭遇3　24
第6話　這い寄る朱槍　33
死後の珍道中
ＩＦもしも第四次で～　39

第1話　プロローグとは少し違う始まり

ーーある男の話をするとしよう。
ーーその男は世界を超え、英雄の力を手にした。
ーー男は平穏を愛すと同時に、戦いを渇望した。
ーーいつしか男は最強の一角に数えられる。
ーーこれは、そんな男の物語。

第1話　プロローグとは少し違う始まり

迷宮都市オラリオ。その名の通り、世界で唯一『地下迷宮』が存在する都市である。
ダンジョンに挑み生計を立てる『冒険者』、彼らは天界より降りてきた神達の恩恵を受け、恩恵を受けた神を筆頭とする組織『ファミリア』に所属する。
冒険者はダンジョンでお金やアイテムを手に入れ、自身のファミリアの神を養う。そ

の代わり、冒険者は一般人と一線を画す力を貰える（もっとも、貰える力で通用するのは、ダンジョンの雑魚敵までだが）。

当然ダンジョンを降り続ければ敵は強くなる。なら、どうすれば雑魚以上の敵を倒せるかって？それには『神の恩恵（ファルナ）』に秘密があるのだが、長いので端的に説明すると、敵を倒せば『経験値（エクセリア）』が入り、主神によるステイタスの更新を行う事で、基本アビリティの『力』『耐久』『器用』『俊敏』『魔力』が強化される。強化し続ければ強いモンスターとも戦えるという訳だ。他にもレベル、魔法、スキルなどややこしい物があるが、今は省略しておこう。

俺はこんな摩訶不思議な物がある、この世界に転生してしまった。型月版クー・フーリンの力とその名を、持って

……（白目）。

説明が長くなったが、現在俺が所属する『ロキファミリア』は、地下迷宮（ダンジョン）に遠征に来ていて、４９階層にて、大量のモンスター達の進撃を受けていた。

「――盾え、構ぇぇッ!!」

響き渡る衝突音。ヒューマンと亜人、モンスターが入り乱れる戦場の中を駆け回り、手に持つ真紅の魔槍『ゲイ・ボルク』で素早くモンスターを刺し穿ち、突き穿つ。射線

に入ってしまった時に、時折飛んで来る味方の矢は、自動発動するスキル『矢避の加護』があるのでスルーする。

「リヴェリア～ッ、まだぁー!?」

戦闘音が響く中、アマゾネスの少女、ティオナ・ヒュリテが皆の思ってる事を代弁する。しかし、名を呼ばれた本人の返事は無く、魔法の詠唱が続けられる。

「【ーー至れ、紅蓮の炎、無慈悲の猛火】」

背後からは、この状況を1発で打破出来る一撃へと至る詠唱。眼前に迫る大量のモンスター。いい加減、相手にするのが飽きてきたので、リヴェリアの一撃を心待ちにしていた。

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

『ーーオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

皆が魔法の完成を待つ中、一匹の『ファモール』が前線の一角を突破する。直ぐに穴を塞ぐが、その一角からファモールが数匹既に侵入して、後衛人へと迫りつつあった。

「レフィーヤ!?」

ファモールによって少女、レフィーヤ・ウィリディスが薙ぎ倒される。地面に倒れたレフィーヤにファモールは手に持つ鈍器を振りかぶる。そこに金と銀の光が駆けつける前に――――――前衛から飛んで来た、朱槍によって、モンスターは心臓である魔石を貫かれ消滅する。

槍を投げた張本人であるクー・フーリンは、澄まし顔で眼前のモンスターを、持ち前の怪力で粉砕する。

駆けつけようとしていた少女、アイズ・ヴァレンシュタインは、後衛に侵入していた残りのモンスターを素早く斬り倒し、前線へと戻り、

「ちょ、アイズ、待って!?」

――直ぐさまファモールの大軍に突っ込んだ。

剣を一閃するだけで、ファモールは斬り裂かれ、絶命する。華麗でありながら正確な剣戟は、前衛のモンスターを減らしていく。

【――汝は業火の化身なり】

「アイズ、戻りなさい!」

魔術は完成しようとしている。その射程にいるアイズは戻る為に跳躍しようとし、足を掴まれてしまう。見ればアイズが殺し損ねたファモールが、下半身を無くしながらも

残った上半身でアイズの足を掴んでいた。アイズは想定外の出来事に剣を使う事を忘れて、拘束を解こうともがく。しかし、拘束は解けない。

ファミリアの前衛陣は、押し留めているファモールが邪魔をして、助けに行けない上に、距離が遠い。この状況を打破する為には、一刻も早い魔法の発動が不可欠。しかし、助けに行っては術の発動は遅れてしまい、余計な被害が出る可能性がある。ーー彼以外なら。

「クー・フーリン!」

「応!任せな!!」

クー・フーリンは直ぐさま、後衛に転がるゲイ・ボルクを呼び戻して、常人では視認する事すら不可能な速さで、槍を一閃する。刹那、彼の前に立ち塞がっていたファモールは死に絶え、アイズまでの道が一瞬開かれる。

クー・フーリンはその一瞬を駆け抜け、アイズのもとに辿り着いた。

「……クー?」

「迎えに来たぜ」

アイズの足を掴むファモールを踏み殺して、手を差し出す。

「捕まれ」

「うん」

「【焼きつくせ、スルトの剣
　ーー我が名はアールヴ】」
　クー・フーリンはアイズを抱えて離脱する。同時にその魔法は放たれる。
「【レア・ラーヴァテイン】!!」
　爆炎がモンスターを飲み込み、焼却する。
　それを尻目に冒険者達は、武具を静かに下ろすのだった。

第2話　兄の背

５０階層。そこはダンジョンにおいて数少ない、モンスターが発生しない休憩場所だ。俺たちロキファミリアは４９階層を踏破し、現在この５０階層で野営をしている。

少し身の上話をするとしようか。

前に少し語ったが、俺は転生者だ。死んだと思ったら赤子になって捨てられていた。そんな俺を拾ってくれたのは、ロキファミリアの主神ロキ。俺が入っていた籠にクー・フーリンの名が刻まれていた為にこの名を名付けられた。（，＿ゝ（）重くないか？その（殴ッ

冗談はさておき、今は俺の愛槍として活躍しているゲイ・ボルクだが、俺の成長と共にその能力が解放される仕様で、神の恩恵（ファルナ）を得る前はただ壊れないだけの槍だった（他の宝具も同様）。もっともＬＶ．７になった今は本家の性能をほぼ発揮できる様になったが。

他にも、強くなるにつれて街の人の反応が…みたいな話もあるが、これ以上過去を話すと、

思い出（尺）したくない（が）トラウマ（長）を掘り（く）返し（な）そう（る）だからまた別の機会に。

それにしても、平和だなぁ（感覚麻痺）。

第２話　兄の背

探し人は、少し離れた場所に１人ポツンと立っていた。頭部を除いた全身を覆う竜胆色の戦装束の上に、ルーン文字が刻まれた深紅の外套を纏った、戦士然とした佇まいの青年。その背中に声を掛ける。

「……クー」

「ん？なんだ、アイズもサボりか？」

振り返った、真紅の双眸が私を捉える。戦っている時の覇気は鳴りを潜め、自然体な笑みで私を迎えてくれた。

「違う。……その、さっきはありがとう。それと、迷惑かけてごめん」

「おー、次から気をつけるんだぞ」

怒られるのを覚悟して、身を硬くしていた私は、そのあっけらかんとした対応に思わず尋ねる。

「……怒らないの？」

「もうフィン達にどやされたんだろう？なら俺から言うことはないな」

まあ、あんまり心配を掛けさせないでくれると助かるがな。と続け、快活に笑うと、木の幹に立て掛けていた、丸盾と槍を手に取る。

「さてと、サボりがバレる前に戻るか」

そう言って背を向けて歩き出す。私は何故か不安に駆られて、その背に手を伸ばす。

「どうした？行こうぜ、アイズ」

その声を聞いて、積もっていた不安が無くなる。誤魔化す様に早足で隣まで行き、足並みを揃える。

私に兄は居ないけど、こんな人が兄だったなら――。

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

サボりがバレない内に戻ったクー・フーリンは、何食わぬ顔で食事を済ませ、作戦会議に出席する。

「それじゃあ、今後のことを確認しよう。

遠征の目的は未到達階層の開拓、これは変わらない。けど今回は、５９階層を目指す前に『冒険者依頼（クエスト）』をこなしておく」

「冒険者依頼（クエスト）……確か、『ディアンケヒト・ファミリア』からのものですか？」
フィンはティオネの発言に頷くと、クエストの内容を説明する。要約すると、５１階層にある『カドモスの泉』から水を採取する事。その為に少数精鋭のパーティーを二つ組むとまで告げると、ティオナが疑問を口にする。
「何でパーティーを二つに分けるの？」
「注文されている量が厄介でね。ただでさえ回収できる水が限られてる、要求量を満たす為には二箇所回らなければいけない」
更に、カドモスの泉は大人数で移動できないと付け足して、パーティーメンバーの選抜に移る。
一班：アイズ、ティオナ（戦闘狂）、ティオネ（狂戦士）、レフィーヤ（狂戦士）。
二班：フィン、ベート、ガレス、クー・フーリン。
「……なぁ、一班、大丈夫か？」
「ンー……」
４人中３人がアレな為に、フィンは暫し考る。
「ティオネ、君だけが頼りだ！」
「ーーお任せください!!」
その一連の流れを見て、クー・フーリンは胸中で呟く。

（……うわぁ、チョロ）

「何か言ったクー？」

「い、いや、なんでもねえよ」

こうして、それぞれの班が決まり。５１階層へと出発した。

第３話　未知との遭遇　1

「オオオオオラァッ!!」
「ハアッ!!」
ガレスがタンクとして敵を抑え、ベートの強烈な脚による一撃が、フィンの槍による突きがブラックライノスを的確に屠りみるみる数が減っていく。
そんな中、俺は彼らの背後で休憩していた。
待ってくれ、これにも理由があるんだ。フィン曰く『お前の疲弊を最小限に押し留めて、５１層で待ち構えるカドモスに単騎でぶつける。道中の露払いは他のメンバーがするから、お前は休んでろ（意訳）』だから、休憩してるんであってね、それにヤバくなったらいつでも、ルーン使えるように準備してるから、休憩というよりバックアップだ。
「ん？」
……楽できると思って、了承したがよくよく考えれば俺損してない？道中の雑魚を３人でローテーション組んでやるのと、中ボスを一人でやるの、どっちが大変か……
フィン、謀りやがったな！
気づいたはいいがもう遅い。仲間に戦わせて楽する最低な男の絵は出来上がってし

まっている（死んだ目）。さて諸君、こういう時に罪悪感を打ち消す魔法の言葉を唱えましょう。

フィンの責任だ俺は悪くない何も悪くない全責任はフィンにあるフィンがやれって言った俺に罪はないフィンが主にフィンが悪いフィンのせいだフィンが……

すると何だか本当にそんな気がするのだから、人間って不思議だなぁ（白目）。一瞬した寒気は、きっと気の所為だろう。団長大好きなアマゾネスさんからの殺気とかあり得ない。

第3話　未知との遭遇　1

51層カドモスの泉。その泉を守る様に横たわっていたカドモスは、侵入者の気配に瞼を開く。それはフィン率いる第一級冒険者達のパーティー。フィン、ベート、ガレスは足を止めて待機する。歩み寄るのはクー・フーリンのみだ。

「よお。相変わらずデカイ図体だな」

『ガァァァァァァァァァァァァァァァァァァッッッ!!』

挨拶がわりのタメ口、返答は咆哮だった。

しかし、クー・フーリンは怯まない。寧ろ獰猛な笑みを浮かべて、紅蓮の外套を翻し

跳躍する。カドモスは空中という人にとっては逃げ場が無い舞台に、自分からやってきた鴨にブレスを吐き出す。

　回避は不可能。普通の冒険者なら、良くて大ダメージ。最悪の場合は即死。しかし、この冒険者（英雄）はーー

「あらよっと！」

　ーー空中でもう一段階跳躍する事で、それを回避した。

『鮭飛びの秘術』彼の能力の本元である『クー・フーリン』も習得した、空気の壁を踏み台にして跳躍する、無限ジャンプ。1人の戦士が一生を掛けて身につける奥義。この世界の彼が試行錯誤して身につけた技（スキル）。

「生憎スケジュール詰まってて、遊んでる暇はねぇんだ。

　だからこの一撃、手向けとして受け取るがいいーー」

　カドモスの眼前に着地し、魔槍に魔力を送り込む。紅い魔力の猛りが、獲物はまだかと急かはしーーその真名が解き放たれる。

「ーー刺し穿（ゲイ・ボル）つ死棘（ク）の槍!!」

『因果逆転の呪い』が働く。魔心臓石に当たったという結果を作り、槍を放ったという原因を後付けする。つまり、『槍が当たったから、放った』という事だ。確定した死から逃れられるはずがなく、カドモスは死に絶えた。

＊＊＊

番人であったカドモスが消え、ガレス達は泉に湧き出した水を回収する。
「……終わったぜ」
「採取完了じゃ」
「よし、直ぐ」
フィンは自身の親指の疼きを感じて、言葉を止める。そこで気づく、クー・フーリンが無言になり、とある方向を睨んでいる事に。そして、耳は何かが這いずる音を捉えた。
「クー!!」
「ああ、来るぜ!ガレス、ベート!戦闘準備だ!!」
現れたのは、巨大な芋虫型のモンスター。
オラリオ内で1、2を争うロキファミリアの冒険者達でさえ、そのモンスターを見たものは居なかった。
「新種か?」
「取り敢えず、ぶっ潰す!!」
ベートが新種へと飛び掛かり、モンスターは口から液体を吐き出す。咄嗟に回避した

が、大部分はベートが背負うバックに浴びてしまう。
「チッ、……あ？ッッッアアアアアアアアアア!!」
「ベート!?」
　ベートは痛みに絶叫を上げる。痛みの正体は、カバンに掛かった液体。それはベートが背負うカバンを溶かして、その背中までも溶かそうとしていた。
　直ぐさま、クー・フーリンは治癒のルーンを施す。
「フィン！どうするんじゃ!!」
「撤退だ、ベート走れるか?!」
「あ、ああ」
　フィンはぞろぞろ湧き出し、逃げ道を塞ぐ新種の一体に槍を突き刺す。モンスターは倒せても、体液で武器を溶かされてしまう。だが、逃げ道は確保でき、逃走を開始した。
　暫く逃げ続けると、絶叫を聞いたアイズ達と出くわす。
　ティオナは助けに入るために、走り出した。
「止せ、ティオナ！」
　フィンは制止の声を上げるが、既にティオナは新種の胴体に大双刃（ウルガ）を振り抜いていた。モンスターは悲鳴をあげ、その傷口から液体を飛ばす。軽くかかったティオナの髪の一房が溶ける。

「えっ!?」
　すぐさま飛び退いたティオナは目を見開く。彼女の武器が溶けていたからだ。
　モンスターは咆哮をあげる。ティオナは大急ぎで回避し、アイズ達と共に逃走に加わる。
「あんなの聞いてないよー!?」
「フィンが止めただろ、馬鹿女!!」
「フィン、あれなんだ!」
「わからない。僕達も突然襲われた」
　フィンは合流したばかりで状況を呑み込めてない、アイズ達に簡単かつ分かりやすく、現状を説明する。
「フィン、あのモンスターは倒せる?」
「可能だ。けど一撃で一つの武器を失う、割りに合わなすぎる。……クー確か君の武器は壊れなかったよね」
「無茶言うな! 槍は溶けなくても、俺が溶けるわ!!」
「……冗談だよ。この状況じゃ難しいけど魔法なら……詠唱する時間を何とか稼いで、群れを殲滅できるほどの強力な魔法を撃ち込めたなら……クーは唯一武器損失の心配がないから前衛として外せない……」

フィンの分析が終わり、レフィーヤに視線が集まる。そうこうしているうちに前方から群れが現れて、挟み撃ちにされそうになるが、そうなる前に前に右の通路に飛び込む。その先は行き止まり、必然迎え撃つしかない。武器を失っていた一班に第二班の予備の武器が渡る。

「親指がうずうずいってる。――――恐らく、来るんじゃないかな」

フィンの呟きが的中し、三方の壁に亀裂が走る。それは、モンスターが産まれる前兆。

『怪物の宴（モンスター・パーティー）』

出口は新種が、周りの壁からは湧いた大量のモンスター。

「ベート、ガレス、ティオナ！レフィーヤを援護しながら駆逐しろ！あの新種は僕とアイズ、クーでやるーーかかれ！」

フィンの号令に、強者達が獲物を構え仕事に取り掛かった。

第４話　未知との遭遇　２

昔から奴の事が気に食わなかった。

俺がいくら嫌いだと言おうが、無視しようが、奴は俺たちの兄貴分だがらと笑って許す。

誰よりも強い癖に、決して驕ることも、弱者を見下すこともしない。

「オオオオオオオオオオオ!!」

雄叫びを上げて、雑魚を蹴り殺す。背中に受けた傷は既に癒えている為に、余裕で動ける。それもまた奴のおかげかと思うと、再び怒りが湧いてくる。

一陣の風が、目の前を通り過ぎる。いや、これは風じゃない。奴が高速で移動した跡だ。

槍の一振りで三匹のモンスターを仕留め、一投で十匹のモンスターが息絶える。誰よりも速く、誰よりも強く、誰よりも頑丈なその背中には、今は届かない。

だがらこそーー

「待っていやがれ!」

いつかその背を追い越せると信じて。

第４話　未知との遭遇　２

ぶっ倒しても、ぶっ倒しても、ぶっ倒しても敵が減らない（ガッチャマン感）。まあ、この悪夢もあと少しで終わるから、我慢だ。

「【帯びよ炎、森の灯火。撃ち放て、妖精の火矢】」

ふと、気になって、戦いながらフィンを見る。俺やアイズと違い、武器が壊れるフィンはどうやって新種に対処するのかと思ったら、敵の足だけを削いで動けなくしていた。

「【雨の如く降りそそぎ、蛮族どもを焼き払え】」

背後で爆発寸前まで膨らんだ、魔力の昂りを感じる。

つまりは死に[離脱]たくなければ戻れの合図だ。

「撃ちます！」

急いで戻る。大砲役の魔術師の魔法なんて喰らったら、タダでは済まない。

「【ヒュゼレイド・ファラーリカ】!!」

炎の雨が放たれ、モンスター達を焼く。焼けばあの新種の体液は意味を成さないか。

それにしても、あの新種は一体……

「……ありがとう、レフィーヤ」

「あ……は、はい！」

まあ、今はいいか。取り敢えずは勝って生き延びたんだ。急いで結論を出す必要はな……

「団長？どうしたんですか？」

「このルームに逃げ込む前……あやうく挟撃されかけた時、モンスター達は前からやってきた。そしてあの道は……クー、疲れてる所悪いが、一足先にキャンプに戻ってく」

言い終わる前に走り始める。何やら嫌な予感がするからだ。

駆ける。駆ける。駆ける。そうして辿り着くは、煙が上がる野営地。溶けた木々。本来ならこの場では聞こえない、戦闘音。野営地を構えた一枚岩の上では、リヴェリア達が防戦を繰り広げる。戦っているのは、案の定、岩に纏わり付いている新種の群れ。道を塞ぐ、新種を槍で薙ぎ払う。

久しぶりにキちまったよ。

気がつけば、宝具解放の呪文を口ずさんでいた。

「【我が魔術は炎の檻、茨の如き緑の巨人。因果応報、人事の厄を清める社。】

……よく耐えたな、後は俺に任せろ」

呪文を口ずさみながら、新種どもを踏み台にして、野営地に戻り、新種の前に回り込む。

「総員！クー・フーリンより後ろに下がれ!!」

少し遅れて、追いついたフィンが指示を出し、団員共々俺より後ろに下がる。

求められるは、大火力。それも新種の腐食液を飛散させずに焼く熱さ。本来リヴェリアがこの役を担うべきなんだろうが、留守番組達の指揮で忙しく、呪文を詠唱していない。なら、俺がやる方が早い。

「【倒壊するは
ーー灼き尽くす炎の檻】」

呼び起こすは木々の巨人。無数の木の枝で構成された、炎を纏った巨人。ケルトのドルイド達の宝具。

全自動追尾式焼却炉は、新種を自身の胸元にある檻の中に片っ端から、放り込み、焼き尽くす。

モンスター達が全滅したのを見計らって、宝具を解除する。

「全員無事か？」

「……怪我人は数人いるが、死んだ者はいない」

リヴェリアの言葉に胸を撫で下ろ……ッ!?

突如、森の方から、破裂音が響き渡る。

現れるは、芋虫のような下半身を持ち、腹は気味が悪いほど膨れている、女型のモンスター。こいつもまた見たことが無い新種だ。カドモスと同等かそれ以上の迫力を纏ってやがる。

「あんな、でかいの倒したら……」

腹に溜め込んだ、腐食液が飛び散るか。

「あの巨体じゃと、魔石だけ綺麗に狙うのも難しそうだのう」

全員の顔に緊張が走る。

すると、徐にモンスターが動き――――粉のような、何かを撒き散らした。

第５話　未知との遭遇　３

クー・フーリンは槍を高速で回し、扇風機の様に風を起こして鱗粉をモンスターに返却する。
「【ＡＵＳＵＺ（アンサス）】！」
粉塵爆発を狙って放たれる火のルーン魔術は、使用者の目論見通り着火剤となるが、本人の思惑以上の爆発が巻き起こってしまう。更に敵には回避されるというおまけ付きで。
（チョッ、粉塵爆発の火力じゃねえぞ。……あの粉自体に爆発性があるのか）
「ーー総員、撤退だ。
速やかにキャンプを破棄、最小限の物資を持ってこの場から離脱する。リヴェリア達にも伝えろ」
フィンは団長として、今取れる最善の手を選択する。それにベートとティオナが待ったをかける。
「おい、フィン!?逃げんのかよ！」
「あのモンスターを放っとくの?!」

「僕も多いに不本意だ。でも、あのモンスターを始末して、被害を最小限に抑えるのには、僕達は邪魔になる」
フィンは忌々しそうにモンスターを睨み、この現状を打破出来る男へと向き直る。
「クー頼めるかい？」
「任せな」
クー・フーリンは肩に朱槍を置きながら、笑ってみせる。真紅の双眸は倒すべき敵を捉えて離さない。
「……私も残る。私の魔法なら――」
アイズは名乗り出る。確かにアイズの魔法である【エリアル】ならば、風を使い腐食液にも対抗できるだろう。しかし、フィンは首を横に振る。
フィンが理由を口にする前に、クー・フーリンが口を開く。
「侮るなアイズ」
普段のクー・フーリンからは想像も出来ない程の低い声、息苦しくなる程の重圧（プレッシャー）。クー・フーリンは無意識にそれを出していた事に気がつくと、直ぐに引っ込め、安心させる様に、アイズの頭に手を置く。
「心配すんな、あの程度の雑魚直ぐに片付ける」
「……うん」

「行くぞ、急げ。
十分距離をとったら信号を出す。それまでは」
「みなまで言わなくても分かってるよ」
ロキファミリアが撤退する。クー・フーリンは自分の仕事をすべく、槍を構えた。

第５話　未知との遭遇　３

走り去る仲間を背にして、新種に向き合う。
邪魔になる外套とローブと盾を捨て、身軽になり、一瞬で間合いを詰めて槍を大振りにスイングする。
叩いた感触は思った以上に硬くて重いが、殺れないことはない。槍本来の使い方である、突きを見舞おうとするも、至近距離で鱗粉を放ってきたので、後ろに飛ぶ事で回避する。
ゲイ・ボルクの真名を解放すれば、おそらく一撃で倒せるだろうが、既に一回発動し、人形も使っている。その為、次使えば魔力の枯渇で精神疲弊（マインドダウン）不可避である。
ただでさえ相手はイレギュラーだ。精神疲弊（マインドダウン）になって動けなくなると不味い。極力

宝具は使わない方向で行きたい。

「そんじゃ、上げていこうか」

加速のルーンを自身に施し、自身の俊敏の能力値を引き上げる。下手に倒せばあの醜い腹に溜め込んでいるであろう、腐食液が飛び出す。合図があるまでは持久戦だ。当たらなければどうという事はない。

発射された腐食液を躱しながら接近し、鱗粉を飛ばす悪い腕を突き落とす。醜い悲鳴をあげながらも残った三本の腕で殴りかかって来るので、しっかりガードを……重ッ！

想定以上のパワーに正面から打ち合うのは面倒だと察し、ガラ空きな胴体を蹴りつけ、反動で離脱する。

「……チッ！」

舌打ちを漏らしながら、追撃の腐食液を槍で弾き飛ばす。

事前に仕込んでいた探索のルーンが、撤退組と俺の距離を大まかに教えてくれる。撤退にはまだ少し時間が掛かるみたいだ。

「……もうちょい距離を開けるか。

鬼さんこちら、手の鳴る方に」

バックステップで後ろに下がりながら、手を叩いて怪物の気をひく。予想通りに、怪物はこちらに誘導され、少しずつ撤退組から距離が離れて行く。

このまま下がりながら、時間を稼ぐ……って、何でコイツ急に止まった？

『アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

怪物は急に咆哮をあげて、脱兎の如く走り出した。

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

怪物は、クー・フーリンに背を向けて、撤退組の方向へと走り出す。当然、それを彼が黙って見ている訳がない。クー・フーリンはすぐさま追いかけようとして、地面に体を伏せた。その彼自身でさえ理解できない行動は、結果的に背後から放たれた、腐食液を交わすことになった。

地に伏せた隙だらけのクー・フーリンを、再び背後から腐食液が襲いかかる。

「クッ、【ＡＵＳＵＺ（アンサス）】！」

火のルーンで相殺して、飛び起き、背後の襲撃者の姿を認識する。背後にいたのは、今彼が相手にしている新種と同種の個体だった。

「もう一体いたのか」

逃げた方を追えば、背後から。背後を片付けていては、逃げた方が撤退組に追いつい

てしまう。
（先に倒すべきは今目の前にいるコイツから。槍の真名を解放する？精神疲弊（マインドダウン）で動けなくなる可能性が高い。使うなら、逃げた方にのみ）
「……迷ってる暇はねえか」
新たに刻まれるルーンが、クー・フーリンのステータスを上昇させる。筋力、俊敏、耐久を強化した肉体を持って、突っ込む。
「食らいなァ!!」
全力の突きが、怪物の腹を貫く。傷口から腐食液が溢れ出し、クー・フーリンの体に降り注ぐ。身体を溶かす腐食液の痛みを、クー・フーリンの固有スキルが、痛覚の機能をオフにする事で無にする。
『アアアアアアアアアア!!』
怪物は苦しみながら槍を掴み、クー・フーリンに腐食液を吐きかけようとするが、もう遅かった。
「汚ねえ手で、俺の槍に触れてんじゃねえ」
クー・フーリンは渾身の力で、怪物に刺さっている槍を持ち上げて、怪物を傷口から真っ二つに両断してみせた。
致命傷を受けた怪物は、生き絶える。

「グッッッ！」

一先ずの戦闘が終了した為に、発動中のスキルが停止する。痛覚が機能し始めて、腐食液を浴びた身体が溶ける痛みに苛まれる。

直ぐにポーションを流し飲み、治癒のルーンを刻む。彼は休むわけにはいかない。逃げた怪物を追う為に走り出した。

＊＊＊

最小限必要な物資を持ち出した、ロキファミリアは十分な距離をとったことで、撤退完了の閃光弾を上げようとしていた。

「団長、大変です！・さっきの新種が凄まじい勢いでこちらに向かっています!!」

「何！」

伝令に来た団員の言葉に、フィンは自分達が撤退した方向を見た。確かに団員の言う通り、怪物は遠くの方に見えた。追いつかれるのも時間の問題だ。

「クーの奴、油断したか」

リヴェリアはそう呟くも、内心では信じられないでいた。状況を知らない彼らからすれば、あの怪物はロキファミリア最強を突破して来た様に見えるからだ。

「ーー仕方ない。総員！迎撃の準備だ!!」

フィンの一声で、彼らは戦闘態勢をとろうとし、一人の少女によって待ったをかけられる。

「まって」

制止を呼びかけたのはアイズだった。

何故と問う前に、彼らの耳に雄叫びが届き、自ずと理解した。

新種の後方。傷は無いものの全身ボロボロの格好で、彼は新種を追いかける。すでに新種の未来は決まっていた。

彼は地面を蹴って、宙を舞う。

脈打つ魔力が、槍の存在を知らしめる。

「『刺し穿つ（ゲイ・）』」

空を蹴って更に加速し、一瞬で距離を詰め、

その必殺の一撃をーー

「死棘の槍（ボルク）』!!」

ーー解き放った。

穿つは心臓（魔石）、狙いは必中。故に、怪物の体から腐食液が飛び出す前に、怪物の魔石を

穿ち貫く。

先ほどまで、怪物がいた場所に降りたった、彼はあっけらかんと笑ってみせる。

「ワリイな、ちょっとヘマした」

精神疲弊（マインドダウン）に陥り、麻痺した体を引きずりながら、クー・フーリンは考える。

（一時のテンションに身を任せると、本当ロクな目に遭わねぇな）

と。

第6話　這い寄る朱槍

ベル・クラネルはとある田舎の村で祖父と共に暮らしていた。祖父は事あるごとにベルに英雄譚を聞かせ、英雄（ハーレム）に対する憧れを植え付けた。ゆえに彼は、ダンジョンに出会いを求めた。

今、その命が今失われようとしていた。本来ならこの階層に存在しない、ミノタウロスの手によって。

だが、運命は少年を見捨てない。

「間抜け」

――朱槍がミノタウロスを貫いた。

気がつけば、ミノタウロスの背後には青年が立っていて、貫いた槍は青年が突き出した物だった。

ミノタウロスから噴き出した血が、少年の顔を濡らす。

「まったく、こっちは精神疲弊（マインド・ダウン）でぶっ倒れそうだってのに。

……おい、なんだアイズ。その疑わしいものを見る目は」

「……別に」

数瞬遅れて、アイズと呼ばれた少女が追いつき、漫才を繰り広げる。
少しして青年は、今思い出したかの様に、少年に手を差し伸べる。
「大丈夫か？少年」
その日、少年は英雄と出会い、初恋を知った。

第６話　這い寄る朱槍

遡る事、少し前。
最後の新種を片付けたクー・フーリンは、何食わぬ顔で告げた。
「キッチリ片付けてきたぜ」
本当は、精神疲弊（マインドダウン）で全身がまともに動かない筈なのに、彼はあっけらかんと笑う。それは一種の意地だった。アイズに「あんな雑魚、秒殺だぜ（意訳）」と宣った手前、苦戦した様子を見せたくなかったのだ。
「よくやってくれた。おかげで被害が最小限で済んだ」
「そいつは重畳。んで、この後はどうするんだ？退却か？」
「ああ。でもその前に……」

背後にいたリヴェリアが、彼の肩を叩き、振り返らせる。
「ん？ムグッ!?……」
クー・フーリン口に咥えさせられた瓶に、一瞬驚くも、それが精神回復薬（マジックポーション）だと分かると、黙って飲み干す。
「プハッ！……いいのかよ、貴重な物資を」
元々、５０階層に辿り着くまでに、ポーション系統の物資は消耗していた。それに加え、イレギュラーな敵を相手するのに、かなりの物資を使い、または犠牲となった。その理由もあって、彼は精神疲弊（マインドダウン）のことを黙っていたのだ。
「今日だけで槍を二回、それに加えて人形、ルーン魔術を大量に使ってる。……それに、少し体の動きが遅い。精神疲弊（マインドダウン）で体が麻痺してるんじゃないか？」
リヴェリアの言葉に、精神疲弊（マインドダウン）を起こした事のある者は、ギョッとする。そう、意地だけで動いてるコイツがおかしいのだ。
クー・フーリンはその空気を払拭する為に、戯けてみせる。
「よく見てるな。流石はオカン」
「誰が母親か！」
周囲から、笑いが溢れる。遠征は終盤へと差し掛かっていた。

＊＊＊

５０階層での激闘の後に、ロキ・ファミリアは地上への帰還を目指していた。そして現在は１７階層。

「まだまだ行けたのに～暴れ足りないよ～」

ティオナは欲求不満で機嫌がよろしくなかった。それを姉であるティオネが嗜める。

「しつこいわよ、あんた。いい加減にしなさい」

そんな折に現れた、ミノタウロスの群れ。ストレス発散と突っ込んだロキファミリアだが、ミノタウロスの集団は逃げ出した。……上層に向かって。

そして、話は冒頭に巻き戻る。

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

遠くの方で、逃げ出したミノタウロスが冒険者に襲いかかるのが見える。俺たちの不手際で人が死んだとか、流石に笑えない。

踏み込む足に力を込めて、地面を蹴る。俊敏に特化しているからこそ、出せる速度。この程度なら目的地まで1秒も要らない。

ブレーキを掛けながら、無防備に背を向けた背中にーー

「間抜け」

ーー朱槍を容赦なく突き刺した。

その一撃は、ミノタウロスの魔石を貫く。

「まったく、こっちは精神疲弊（マインド・ダウン）でぶっ倒れそうだっつうのに。

……おい、なんだアイズ。その疑わしいものを見る目は」

数秒遅れて駆けつけた、アイズの白い眼から逃れる様に、ミノタウルスの返り血を浴びて、真っ赤に染まった少年に手を差し伸べる。

「大丈夫か？少年」

少年と視線が交差する。……何だろうか、このこそばゆい視線は。偶に街を歩いていたら、子供が俺に向けるそれに似ているが……

「あ、貴方の……」

「？大丈夫ですか？」

何か言い始めようとした少年と、アイズの言葉が重なる。そこで少年は初めてアイズを視界に入れ――――

「だぁああああああああああああああああああああああああああああ？！」

ーー叫び声を上げて、脱兎の如く走り出した。

背後でベートが爆笑している。まったく、そんなんだからアイズは振り向かないんだ。

それにしても、あの少年。

「何を言おうとしてたんだ？」

もとより、出来はあまり良くない頭だ。考えた所で意味がないか。

考えを止めようとして、ふと先程の少年の目を思い出した。アレは、子供が仮面ライダーやウルトラマンといった、英雄（ヒーロー）に向ける目だ。

「ーーハッ」

降って湧いた思考を鼻で笑う。英雄？思い上がりも甚だしい。英雄の紛い物、人の宝具（カ）を利用してるだけの小物、それが俺だ。

「……クー？」

立ち止まって動かない俺を、不審に思ったのか、アイズが俺に声を掛ける。マイナスな思考を振り切り、何でもないと頭を撫でる。

確かに俺は紛い物だ、彼（クー・フーリン）とは違う。でも、大切な家族（ファミリア）だけは守りたい。……なんて、青臭いかね。

思考を中断し、止まっていた足を一歩前に踏み出した。

死後の珍道中
ＩＦもしも第四次で～

英霊達もすなる聖杯戦争という物を、借り物の我が身でもしてみんと、いや、みむとだっけ？……元ネタの続きを忘れたわ。

とにかく、オラリオをクー・フーリンとして駆け抜け、気がつけばうっかり英雄だ。そして現在、日本の冬木にて行われる『第４次聖杯戦争』で槍兵（ランサー）として召喚された。本来なら、この聖杯戦争で召喚されるランサーは俺でも彼（クー・フーリン）でも無い、だがマスターは時計塔のロードのケイネス・エルメロイ・アーチボルトと合っている。おそらく、俺が（ランサー）代わっただけで他は俺の知る、第４次聖杯戦争（Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ）と相違ない。

まぁ、召喚された事には文句しかないが、ぐちぐち言ってても意味が無い。終わりの時まで槍を振るうだけさ……ステータスクソザコだけど。

状況説明終了（閑話休題）。そして今俺は、倉庫街にて敵サーヴァントを誘い出していた。彼此数時間、ずっと待ちぼうけを喰らっていたが、それももう報われた。

響く足音は二つ。足音の軽さからして片方は女、もう片方は男の様にも思えるが、鳴り響く金属音から鎧を着た女と判断する。

原作通りなら、彼女らはセイバー陣営のマスター（仮）とサーヴァントセイバー。
俺は閉じていた瞳を開いて、壁から背を離した。
「よお、いい夜だな。此度の英霊連中はどいつもこいつも腰抜けしかいねえと思ったが、アンタら違うみたいだな」
ニヒルに決めて、アインツベルンのマスター（仮）と青いセイバーさんを…ハ？黒？え、なんでオルタってるの君？
「戦闘を開始する」
「え？ちょおま」
刹那、セイバーの姿が消える。目を見開き、闇夜に紛れた黒いバトルスーツを、僅かに視界が捉えた。それを目で追っていては間に合わない。頭上に槍を構えて、間一髪のところで、その不可視の剣を防ぐ。
頭上には剣を槍に叩きつけているセイバーの姿。
状況が悪すぎる。此方は全力で槍を支えなければ、そのまま体を真っ二つにされてしまうのに対し、アッチは全く本気じゃない。
「ほう」
セイバーが感嘆の声をあげると共に、彼女の魔力が剣の勢いを強くした。当然、弱体化しきった俺の筋力では止めきれない。辛うじて剣を逸らすも、俺の体は地面へと叩き

つけられた。

「死ね」

魔力で強化された蹴りを地面を転がる事で躱しながら、槍を棒高跳びの様に使って宙に飛び上がり、落下しながら槍を構える。セイバーは受け止めるために剣で頭上をカバーしようとするが、甘い。俺は空を蹴ることで落下の速度を速め、セイバーが剣を構えると同時に着地する。

「お返しだ、礼はいらねえぜ」

渾身の力を持って振るった槍で、セイバーを薙ぎ払った。欲を言えば、無防備な腹に突きを入れたかったが、生憎使い慣れてない槍の為、突きを放つには持ち方を変える必要があり、それをしていては間に合わなかった。だが、コンテナに突っ込んだ奴は、ある程度ダメージを負ったことだろう。

「んあ?……　…チッ!」

うなじに走ったピリピリとした直感に従い、大きく後ろに飛ぶ。その行動は正解だった。数瞬前までいた場所が、魔力による衝撃波によって大きく削り取られれたからだ。

次に、セイバーがコンテナから弾丸のような速さで突っ込んでくるが、体勢が悪かったためか、さっきより遅い。迫るセイバーに対抗するために、槍を構えた。

▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

自身が召喚したサーヴァントとの戦闘を使い魔越しに見ていた、ケイネスは自身のサーヴァントの評価を改めていた。

（相手のステータスの多くはＡ　、この聖杯戦争いきなり敗北かと思ったが……）

ケイネスの予想に反し、ランサーはステータスに大きな差があるセイバー相手に善戦しているのだ。

ステータスには一切頼らない。生前の経験を最大限まで活かした『巧さ』が今のランサーの最大限の武器だ。

（実に惜しい。あれ程の英霊をもし万全の状態で召喚できていたなら、私の勝利は揺るがなかっただろうに。……いや、マスター同士の覇を競いあった上での勝利にのみ価値はある、か）

ケイネスの思惑を他所に、セイバーとランサー、両者の対決はより激しさを増していった。

＊＊＊

金属同士が撃ち合い、甲高い音を響かせる。

両者の対決に決着がつく様子はなかった。セイバーの攻撃は躱され、逸らされ有効打を与えられず、ランサーは防戦一方で攻める暇がない。

「チッ、ちょこまかと」

「そう褒めるなよ…って、ヤベ」

ランサーの手から槍が弾き飛ばされる。致命的な隙、ソレをセイバーは見逃さない。

「貰ったぞ」

横薙ぎに振るわれる不可視の聖剣。ランサーは大きく上体を後ろに逸らすことで回避し、そのまま地面を蹴って宙を舞う。槍を再び手にしたランサーは、大きく距離を取る。

（ゲイ・ボルクを、いや、せめてルーンを使えればワンチャンあるんだがなぁ）

ランサーは自身の獲物を恨めしそうに見つめる。金属の輝きを放つソレは、ブルブルと震えて敵との死合を催促しているようだ。

――――『憤怒の恐槍（ドウ・バッハ）』ソレがその槍の真名だ。

どんな状況でもゲイ・ボルクであれば、因果逆転の呪いで確殺できる。ルーン魔術が

あれば、ステータスの補強ができる。しかし、前者は此度の召喚の際にゲイ・ボルクを持ってこれず、後者はクラスがランサーの為、使えないことはないが魔力の消費に釣り合わない。その上、ステータスはクソ雑魚ナメクジ。

圧倒的不利な状況、しかし彼の表情にはどこか余裕がある。

（だが時間を稼げば、他のサーヴァント達が乱入してくるはずだ。だから、早く来てくれ征服王!!あ、英雄王は座したままお帰りくださいって、今髪掠めたァッ!?）

失礼、内心は大混乱だ。